

# 代名詞遠称「あ」系語と「か」系語の差異

古田東朔

一

代名詞の中で他称といはれるものが、それぞれこ・そ・あ・かなどの語で始まり、そこにいづれも整然とした系列の存してゐることについては、今更ここにいふまでもない。

この中のあの系列の語と、かの系列の語、すなはち、

あ(は・の) あれ あしこ あなた  
か(は・の) かれ かしこ かなた

の両系の語は、平安朝以後著しく使用されるやうになつたが、この両系の語は、明治以後ともに「遠称」の名をもつて呼ばれ、近称こ、中称そに対応する一群のものとして、まとめて考へられてゐる。

明治以後のかうした三分類を行つてゐる最も早いものは、田中義廉の「小学日本文典」(明治七年)であらう。その中の「人代名詞」の章においては、第三人称といふ名目のもとに、これ・それ・あれの遠近の差別について説くところがある。(註二) 彼のかうした考へは、その範とした箕作阮甫翻刻「和蘭文典前編」(天保十三年) Maatschappij: Grammatica of Nederduitsche Spraakkunst が、deze, die, gene

の三種の指示代名詞について述べてゐるところから導き出されたものに外ならないものであらう。(註三)

しかし、「小学日本文典」は、ただ遠中近の差別について説くだけであつて、別にそれらの各系列の語に触れてゐるわけでもなく、また、かの系列の語についても述べてゐない。(註三) かうした差別を更に各系列に整理した形で示したものは、大槻文彦博士の「語法指南」(明治十二年)である。(註四) その中では、あの系列の語に、さらにかの系列の語も加へ、事物、地位、方向などに用ゐるものの区別を行つてゐる。次の表のやうである。

|    | 近 称       | 中 称       | 遠 称            | 不 定 称              |
|----|-----------|-----------|----------------|--------------------|
| 事物 | これ こ      | それ そ      | か あれ か あ       | いづれ なに<br>(ど) (れ)  |
| 地位 | ここ        | そこ        | あしこ あそこ<br>かしこ | いづこ いづく<br>(ど) (こ) |
| 方向 | こなた<br>こち | そなた<br>そち | あなた<br>あち      | いづなた<br>(ど) (ち)    |

さうして、「の」のついたときには、指示する場合が認められるとし、この指示代名詞においても、近称、中称などの区別があると

する。人代名詞、指示代名詞、そのいづれにおいても、あ系の語、か系の語をともに一つにまとめて遠称としてゐるのである。

このやうに、あ系とかか系の語を、一群のものとして考へること(註五)は、以後の文法書にいづれも共通してゐるところである。時代の發生の差異について述べることはあつても、特に意味上の差異について述べるところはない。

しかしながら、江戸期国学者の研究の中には、これに対し、差異を認めるものがある。たとへば、富士谷成章は「かざし抄」(四年)の「あは」の条において、

【あは】俚言に人あちにあるものは√といふ「かは」といふよりは今すこしはるかなる心也、是「か」と「あ」とのわかれ也「かは」「かれ」「かの」は、只今めにみゆるものをいふ「あは」「あれ」「あの」は、めのまへならぬものをいへり、但多ぐれに人がほのみえぬ時を、かはたれ時とも、あはたれ時ともいふたぐひは、心おほくかはらず、下の「か」の条にあはせて心得べしと、その差異について触れてゐる。かは「只今めにみゆるもの」をいひ、あはそれよりは「今すこしはるかなる心」であり、「めのまへならぬもの」をいふとしてゐるのである。大国(野之口)隆正も同様である。その「ことばのまさみち」(天保七年)の中では、

あか。こ。その四つ、つねにむかひて言語をたすく。……この四つのわかち、あはわれにうときをさし、かはうとき中にしたしき所あるをさし、そはさきよりさきをさし、こはわれにはなれぬそばをさす。あか。その三つ、共にこにむかへり。

と述べてゐるし、同じく彼の「神理入門用語訣」(慶應三年頃)の中では、つぎにさすことば、これは文字にうつしては虚辞といふべし。あの、かの、

その、この、しか、かくなどいふたぐひなり。

あ……こ

か……こ

……そ

こを今とし、われとして、かの、かなたは、かよへどもへだてであること、図のごとく、あはわれをへだてて、はなれたり。そはこれもはなれて、われにむかへり。さきからさきをいふところなり。

と述べてゐる。かは「うとき中にしたしき所ある」をさし、こに「かよへどもへだてである」ものである。一方あは「われにうとき」をさし、「われをへだてて、はなれ」てゐるものであると述べてゐるのである。更に、彼はこの後に「見ていふ」あ・かと、「見ずしていふ」あ・かとに分け、用例を示して説明を加へてゐる。

これらは両系列の語すべてを通して差異を認めてゐるものであるが、この中のどれかの語だけに限つて差異を認めてゐるものには、外にまだ「倭訓栞」その他がある。(註六)

あとかについては、ここに見たやうに、その差異を認める説、認めない説の両説がある。特に明治以後に至つては、認めない説の方が一般的傾向であるが、それなら果して、両系の語の差異は認められないであらうか。

(註一) 田中義廉「小学日本文典」巻二・二六丁ウ。

(註二) 「和蘭文典前編」二九丁ウ。しかし、この書の中では、三種の語の間にそれぞれ近中遠の差があるといつてゐるわけではなく、gene(遠)とd-eze(近)の差を述べるだけである。なほ江戸期の鶴峯戊申の洋風文典「語学新書」が「指物代名言」としてあげてゐるのは、この、その二つだけである。

(註三) しかし、「指示代名詞」の章では、か・かのもあげてゐる。

(註四) この三種の区別は、大槻文彦博士も英文典よりは、この「和蘭文典」に示唆を受けたものではなからうか。(同書を学んだことについては大槻博士自身も明言されてゐる。)開成所「英吉利文典」、慶應義塾<sup>ビネオ</sup>「英文典」は this, that の二種を指示形容詞として述べてゐるだけである。

(註五) 三矢重松博士「高等日本文典」、山田孝雄博士「日本文法論」「日本文法学概論」、小林好日博士「国語国文法要義」、安田喜代門博士「国語法概説」、橋本進吉博士「新文典別記上級用」、木枝増一氏「高等国文法要義」など。

(註六) 「倭訓栞」は、あはについて「詞にいふはあれはの略語也。貫之集源氏なとにあはと見るとよめり。遙に遠く見ゆる意也といへり。又あはやとも見え、嗟嘆の意にいへり。」といふ。「竹取物語解」は、田中大秀自身はあのかのは同様であるとしてゐるが、一方「但し、かのは躰はしき言、あのは打解けたる言と聞ゆ、と鈴木氏云れき。」と鈴木腹の説を紹介してゐる。また、以下の「あはとこそ見れ」の歌の箇所で触れるやうに、大和物語の諸註釈ではあはをは「はるかに、遠くみる」といふ事なり。」とする見解が多い。

## 二

竹取物語、伊勢物語、古今集、土佐日記、大和物語、枕草子、源氏物語、更級日記に見えるあ系語とか系語は下のやうである。<sup>(註二)</sup>ここでは転用されてゐるもの、複合語もすべて、その語の中に含める。この表から、あ系語は枕、源氏以後になつて(宇津保・落窪を見ることができなかったが)、使用されるやうになつたがそれでもあなを除いては、か系の語ほどに使用されなかつたことがうかがへよう。以下、あとか、あれとかれといふやうに両者を対比しながら見ていく。

|            | 竹取 | 伊勢 | 古今 | 土佐 | 大和 | 枕  | 源氏  | 更級 |
|------------|----|----|----|----|----|----|-----|----|
| あ<br>(は・の) | 1  |    |    |    | 1  | 2  | 7   | 3  |
| あれ         |    |    |    |    |    | 8  | 4   | 3  |
| あしこ        |    |    |    |    |    |    | 2   |    |
| あなた        |    | 1  | 3  |    |    | 13 | 76  | 1  |
| か<br>(は・の) |    |    |    |    |    |    |     |    |
| かれ         |    | 2  | 2  | 7  | 15 | 24 | 89  |    |
| かしこ        |    | 2  | 1  | 2  | 4  | 3  | 125 | 1  |
| かなた        |    | 1  |    | 2  |    | 2  | 37  |    |
|            |    |    |    |    |    |    |     | 2  |

しかし、この場合、代名詞の遠称、近称などといふ呼び方は、いふまでもなく、単に現実の場所的遠近をさしてゐるものではなく、話し手の意識における心理的遠近をさしてゐると解すべきものである。すなはち、話し手の対象のとらへ方を直接に示したものであるから、たとひ同一の対象であつても、それをこととかともいふことがある。であるから、同じ遠称とされてゐるあとかを比較し、そこに差異が認められるか否かを問題にするには、どうしても、その前後の語句、文脈などをとりあげて見ていかななくてはいいけない。ここでは、さうした方法をとつたが、それが一方では、主観的解釈に陥るおそれがないとはいへないから、その点はできるだけ注意する。

## 一、あとか

あとかは、かが「何(や)か(や)」と用ゐられる(源氏に二十五例)外には、あは・あの、かは・かのとなつてゐる例だけであり、その中でも、ののついてゐる例の方が大部分である。まづ、あはとかはとでは、そのすべてが歌の中で「淡」と「川」にかけて使用されてゐる例だけである。

○浜千鳥飛び行くかぎりありければ雲立つ山をあはとこそ見れ(大和・一四五段)

あはと見る淡路の島のあはれさへ残る隈なく澄める夜の月(源氏・明石)

廻り来て手に取るばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月(源氏・松風)

○思へども人目につみの高ければかはと見ながらえこそ渡らね(古今・恋三)

ふるさとをかはと見つも渡るかな淵瀬ありとはむべもいひけり(大和・一〇段)

くづれよる妹背の山のなかなればさらに吉野のかはとだに見じ(枕・八〇段)

これらはいづれも「見る」とともに使用されてゐるが、中でもあはの最初の大和の例は、「下に遠く候ふに、『かう遙かに候ふよし、歌仕うまつれ。』とおほせられければ、」といふ文章が、その前にある。(御巫本・鈴鹿本には「かう遙かに候ふ」が欠けてゐるが、それにしても「下に遠く候ふ」の箇所はある。)(「遙かに候ふよし」をみかど自身は「かう」(こに關係のある)といつてゐるが、その離れてゐることがらを、特に遊女白がとりあげたとき、あはと表現したと解されるのである。季吟の「大和物語抄」は「あはとこそみれとは、はるかに、遠くみるといふ事なり。」と述べ、木崎雅興の「虚静抄」、前田夏蔭の「錦繡抄(纂註)」もこの見解に従つてゐるが、右の点に注目したからであらう。次の源氏の歌にし

ても、もとの躬恒の歌は「淡路にてあはと遙かに見し月の近き今宵は所がらかも」であり、その「遙かに」が「近き」と対照されてゐるから、「手に取るばかり」といふ語句が、その「遙かに」を意識してゐることは明らかである。とすれば、あはは遠いもの、遙かなものをさしてゐることばだといへる。

これに對して、かはの方の例では、大和の歌は監の命婦が堤にあつた家を買つた後、その家の「まへを渡りければ」詠んだ歌である。古今の歌のかはは人目が多くなければ渡ることのできるであらうと思はれる程の範圍をさしていつてゐるものであるし、枕の歌のかはは交友の親しさをとりあげたときのことばである。

右のことが認められるとすれば、あはとかはには、ここにあげた例だけしかなく、また、かけことばとして使用してゐるための意味のずれはあるにもせよ、なほ、その対象のとらへ方には差異が存するといへる。

次に、あのとかのについてであるが、これも多分さうであらうと考へられる。ただし、あはとかはほどに明確ではないやうである。

○あゝ国の人には、みなあきなむず、あひ戦はむ人もあらじ。(竹取)

院の御絵はきさいの宮より伝はりて、あゝ女御の御方にも多く参るべし。(源氏・総合)

女房の局なる人をさへ「あのおもと」「君」などいへば、めづらかにうれしと思ひてほむる。(枕・二四七段)

御簾をおし擧げて、「あゝのこ、こち寄れ、」と召しければ、(更級)

○そこなる女、京の人はめづらかにや覚えけん、切に思へる心なんありける。

さてかの女、(伊勢・一四段)

月の都の人にて、父母あり。片時の間とて、かの国よりまうで来しかども、  
(竹取)

舟に乗るべき所にて、かの国人、馬のはなむけし別れ惜しみて、(土佐)

ただかの遺言を違へじとばかりにいたし立て侍りしを、(源氏・桐壺)

姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、所々語るを聞くに、(更級)

右のやうな例などがあるが、あのではここにあげた外に、「あ(註四)のわたり」(源氏・浮舟)、「あの人、あの人柄」(更級)が見られるくらいである。この中「あ(註五)の女御の御方」はあなたの所で触れる。まづ、

「あ(註五)の国の人」は、月の都の人に負けるものと話しあつてゐるのを、さうではない、この国の人とはとも及ばぬといひ聞かせる最初の言である。「あのおもと」は、さういへば「うれしと思」ふ語であり、「あのをのこ」は使つてゐる(身分の差のある)者への呼びかけ、「あ(註五)のわたり」は「下々の人々の忍びて」申したことば、「あの人、あの人柄」は「いとすくよかに、世の常ならぬ人」とすぐ続いた箇所(註五)で語られる「人」である。そこには、力、身分、人からの差が示されてゐると、まづ、解することができ。しかし、かのに比べて用例が少ないし、右のやうな場合もかのに含めて使用してゐる例があるから、同じ系列の他の語の場合を考へ合はすと、やはり差異があるといへるが、特にここだけで両者の差異を見ることは危険であらう。

しかし、かのにはあのと違つた用法がある。先行表現を受けたり(右の伊勢の「かの女」などの例)、あるいは既に互ひに知りあつてゐると考へられる対象を述べるときに使はれるのが大部分である

が、その外に、この、そのとともに対応して(右の源氏の「その物語、かの物語」の例)使はれることである。こ、そと対応して使はれる例は、以下にも見るやうに、かれ、かしこ、かなたにおいても多いが、これに對して、あが、こ、そとともに使用される例はあなを除いては極めて少ない。しかも、そのあなたの場合には、両者対立するもの、隔てのあるものをとりあげてゐるのであるから、このやうにかのにおいて他のか系の語に共通する用法のあることは、あのと相違する特徴であるといはなければならない。

## 二、あれとかれ

あれとかれとでは、私の見た範囲からいへば、あれの用例が現はれるのは枕からであり、全体の傾向としては、やはりかれの方が多く使用されてゐる。両者の二、三の例は左のやうである。

○「あれは誰ぞ。願証に。」(枕・六段)

「あれ見せよ、やや、母。」(枕・一四七段)

わが身にては、まだいとあれ(宇治の老女たち)が程にはあらず、目も鼻もなほしと覚ゆるは、(源氏・綵角)

「あないみじ。さは、あれ(文六の佛)に酒おし奉らむ。」といへば、(更級)

○草の上に置きたりける露を「かれはなにぞ。」となん男に問ひける。(伊勢・六段)

こと人よりはけうらなりと覚しける人の、かれ(やぐ)に覚しあはすれば、  
(竹取)

火びつに煙の立ちければ、「かれはなにぞと見よ。」とおほせられければ、  
(枕・一七七段)

心あてに「それか、かれか。」など問ふなかに、(源氏・帚木)

あれとかれのうち、特にかれは右に見たかの場合と同様に、これ、それとともに使用される例が多い。これとともに使用されてゐるのは、伊勢では二例中一例、古今では二例全部、土佐でも七例全部、大和では十五例中十二例、枕では二十四例中七例、源氏では八十九例中四十七例であり、それとともに使用されてゐる例は、枕に三例、源氏に三例である。この例のかぎりでは、かれは他の称の語特にこれとともに対照して使用されることが多いといへる。あれには、このやうにこれ、それと対照させてゐる使ひ方は少ない用例ではあるが、見られない。

意味上からいへば、まづ対称として転用されるあれには枕の「あれは誰(何)そ」のやうに、「誰(何)」と結びつきたいひ方があるといふことである。枕にはこの他にも「あれは誰そ。あらはなり。」(二六二段)、「あれは誰そや。」(二〇〇段)などがあるが、源氏もあれの用例四例中の二例が「あれは誰そ。」(空蟬・浮舟)である。

(異本には「あれはたれ時」(初音)もある。)更級にも「あれはなぞなぞ」がある。かれの方のかうしたいひ方は、かれの全用例からすれば少ない。右にあげた例の伊勢の「かれはなにぞ」、枕の「かれはなにぞと見よ。」の外には、源氏では「かれはたれぞ」(蓬生)、「かれは何ぞ」(手習)などがあるくらゐであるが、その場合にも、そこに含められてゐる気持ではあれとかれとで相違してゐる点があると考へられる。枕の「あれは誰そ。あらはなり。」は下人に「ものはしたなく」いひ、源氏の空蟬の「あれは誰そ。」は老女が「おどろおどろしく」問ひ、浮舟の「あれは誰そ。」は「例ならず」守りの

敵しい番人がとがめ、更級の「あれはなぞなぞ。」は行きかふ人々が「やすからず言ひ驚き、あさみ笑ひ、嘲る」ときのことばである。一方かれの方の伊勢の例は、まだあれが用ゐられてゐないから別とし、枕の「かれはなにぞと見よ」は「火びつに煙の立ちければ」、源氏蓬生の「かれは誰ぞ」は惟光が「寄りてこわづくれれば」、浮舟の「かれは何そ」は「白きものの広ごりたるぞ見ゆる」ときのことばであつて、枕の例は一応例外としても、あれのやうに特別に詰問したり、驚いたりするほどの強い感情が含められたものではない。

また、あ、かは助詞「の」を伴なひ、「が」は伴なはなかつたが、あれ、かれは「の」の方を伴はず、「が」を伴つた例だけである。「あれが」には、「あれがやうに」(二五三・一五七段)が枕に二例、「あれが程に」(綵角)が源氏に一例あり、これに対して、「かれが」の方は、大和に「かれが(嬬)申さむこと」(二四六段)、枕に「かれが(常陸)はしたなくて」(八三段)、「これがことはかれにいひ、かれがことはこれに聞かすべかめるも」(二二〇段)、「かれが(早)絶えば」(二八九段)の例がある。このうち、大和の例はあれが他に使用されてない場合の例であり、枕の「かれがことは」はこれと対照させての使ひ方であるから、まづ除外して考へられる。さうなると、あれ、かれの全使用例の中で、「が」のついた場合の比率はあれの方が多く、かれの方が少ない。(校異を問題にしたら、さらに枕の残る例外も確証としたい。)ところで、助詞「が」は相手を軽んじた場合に使用される語といはれる。(註一〇)とすれば、あれ自身に、対象に対する隔たりの意識のあつたことが、このやうな「が」を伴

なつた輕視の例として現はれるに至つたと考へられるのである。

また、枕の「あれ見せよ。」は、その後、子どもがその品物を「手づからひき探し出でて」とあるから、見たいがまだ見ることにできない物を、あれとさしてゐるとられる。これに對して、かれの方は、「見る（聞く）」と結びついた用例を、一通りあげると、枕に「かれ見給へ。」（六段）、「かれ見侍らむ。」（七段）、「かれ見奉らせ給へ。」（二九六段）、源氏に「かれ聞き給へ。」（夕顔・少女・柏木）、「かれ見給へ。」（若菜下・浮舟）とある。これらは話し手の見えるもの、聞えるもの、知つてゐるものを、相手に「見（聞き）給へ。」などといつてゐる。あれにはかうした用例はない。成章があつて「めのまへならぬものをもいへり」と述べてゐる言が思ひ合はされるのであつて、この点、かれの方は、何等かの意味において話し手が対象を承知してゐる氣持が表はされてゐるといへる。

以上、あれとかれを比較してきたが、一般的傾向として、あれの方には話し手と隔たりのあるもの、身分の差のあるもの、未知のものをさす場合が多く、かれの方はその反対であると判断されるのである。枕の六・一三八・一五七段のあれなどは、特にかう解することによつて、より適切な解釈が得られると思ふ。

### 三、あしことかしこ

あしこの用例は、源氏に二例あるだけである。これだけでは比較することができないが、一応左にその用例をかける。

○この国の奥の郡に、人も通ひがたく深き山あるを、年頃も占めおきながら、あしこに籠りなむのち又人には見え知らるべきにもあらずと思ひて、（源氏・若菜上）

例の人々、「なほあしこもとに。」など、そのかし聞ゆ。（同・宿木）  
○……と書き置きて、かしこより人をこせばこれをやれとて往ぬ。（伊勢・九六段）

この男は、ここかしこの国がちにのみありければ、（大和・二四二段）  
ここかしこに立ちさまよひたるも、いとをかし。（枕・三三段）  
命婦かしこにまかでつきて、（源氏・桐壺）

この中で、若菜のあしこは「人も通ひがたく深き山」をさし、宿木のあしこは御簾の外にゐる薫君のもとへおいでなさいといつてゐることばであるから、隔絶してゐる地、御簾で隔てられてゐる向かふといつた意味がこめられてゐると考へられるが、この用例だけでは断言できない。

ただ、かしこの方には、他のか系の語と同じやうに、こと結びついた用例が多い。（そこと結びついてゐる例はない。）伊勢は二例中一例、古今はその一例、土佐は二例中一例、大和は四例全部、枕は三例全部、源氏は一二五例中四六例となつてゐる。<sup>（註二）</sup>源氏のそれ以外の用例は、ある地域、住まひ、部屋などから、さらにそこに住む人をさしてゐる場合である。（しかし、この場合には、あ系のあなたの方にも同じやうな意味をさすことがある。）ただ、それにしても、あしこことかしこでは、あしこの方の用例がかしこに比べて極めて少ないから、何ともいへない。他の語と比べたとき、やはり差異が認められるのではないかといへるくらゐであらう。

### 四、あなたとかなた

あなたとかなたとでは、まづ、別々に分けてかなたの方から見て

いく。かなたは、全用例すべてこなたかなたとなつてゐるものだけである。

こなたかなたの御目には、すももを二つつけたるやうなり。(竹取)

白雲のこなたかなたに立わかれ心をぬさとくなく旅かな(古今・巻八)

車のこなたかなたにさしたるも、(枕・二〇九段)

こなたかなた心をあはせてはしたなめ煩はせ給ふ時も多かり。(源氏・桐壺)

そのち、こなたかなた(源氏と)より文などやり給ふべし。(同・末摘花)

廂の中の御障子を放ちて、こなたかなた(紫上、明石女)御几帳ばかりをけぢめにて、(同・若菜下)

大徳たち出で入り、こなたかなたを引き隔てつつ、(同・権本)

右のやうな例であつて、この場合は、「両方・方々・だれかれ」などといった意味を表はしてゐると考へられる。口語では勿論「こなたあなた」にしても、「こちらとあちら・あれやこれや」となり、かなたとあなたと間には別段の違いはないやうであるが、しかし、以下のあなたの例に見られるやうな「反対がは」とか「向かふがは」といった意味は、用例すべてに通じて見ることができない。右の竹取の「こなたかなたの御目」にしても、一方をこといつたからもう一方をかといつたのであり、かなたがそれほど遠くをさしてゐるものではない。ただ、右の最後の二例が、あるいは隔てのあることをさしてゐるかとも考へられる例であるが、これにしても、一方は「廂の中の御障子を放ちて」とあり、一方は「部屋の中」を引き隔てるのであるから、特に隔てを意識したものではない。

なほ、この場合、あとで見るあなたが、方向・場所をさすことから転じて、そこにゐる人をさす例が多いやうに、こなたかなたが、

二人またはそれ以上の人をさしてゐる場合がある。(右の末摘花の例。)解釈の相違によつて差があらうが、源氏では半数以上の約二十例前後が、そのやうな意味に使用されてゐるのである。——ただし、一人をさしていふときにはあなたであるから、特定の人にしても、二人以上の人をとりあげていふ場合がこなたかなたであつたと考へられる。

次に、あなたにおいては、まづかなたと違つた点として、「反対がは・向かふがは・裏がは」の意味で使はれることがある。

あかずして月のかくるる山もとはあなたおもてぞこひしかりける(註一三)(古今・巻一)

七

「あなたの口に蜜をぬりて見よ。」といひければ、(枕・二三〇段)

掛金を試みにに引きあげ給へれば、あなたよりはささざりけり。(源氏・帚木)

こなたをばうしろめたげに思ひて、あなたさまに向きてぞ添ひ臥しぬる。(同・宿木)

これらのあなたは、(ある隔てを置いた)向かふ側と解することができる。なほ、最後の例のやうにこなたと一緒に使はれてゐる例があるが、この場合にも相對する意味が示されてゐる。他の例でも、表現されてゐないだけで、あなたに對するこちらがはは、勿論こなたである。特に、こなたとともに使はれる場合には、右と少し意味が違つて、向かひあつてゐるこちらとあちらといふ意味であなたが使はれることもある。「こなたの人、あなたの人、みな心もとなくうちまもりて」(枕・二三八段)、「あなたにも心して、はての巻は」(源氏・絵合)などの歌合・絵合における右方、左方といった場合にあなたが使はれるのである。「あなたの岸」(更級)なども、やはり、これと同じ使ひ方であらう。



さらに、あなたの方には、ある限界より向かふをさしていふ場合がある。地域、場所をさしてゐるものとしては、「山崎のあなた」(伊勢・八三段)、「関のあなた」(源氏・賢木)「津の国までは船にて、それよりあなたは馬にて」(同・落標)などの例がさうである。また、過去、未来、どちらの時間をさす場合もある。「そがあなたの夜」(枕・二七七段)、「あなたの年頃」(源氏・蓬生)、「みそとせのあなた」(同・朝顔、夕霧)などは過去の場合の用例である。「目の前に見えぬあなたの事」(源氏・若菜上)「物のあなた」(同・鈴虫)は未来の場合の用例である。類聚名義抄(観智院本)には「以往」に「アナタ」とあつたりするから、あるいは過去をさす場合の方が多かつたかも知れないが、いづれにせよ、時間的なある限界から向かふをさすものである。ここにも隔たりは示されてゐる。

さらに、源氏では最も多い例であるが、ある場所、部屋、それから転じて、そこにゐる人をさす場合がある。「あの女御の御方」とあつた例も、この使ひ方と関係があると考へられる。かしこにもかうした用法があつたが、あなたの場合には、右に見てきたやうなところからいつて、ある隔たりの気持がやはり含められてゐると見てよいと思はれる。場所や部屋の意の時には「渡る・参る」といったことばなどがともに使はれてゐることから、さう見ることができよう。これらは、それから転じてそこにゐる人をさしていふやうになつたのであらう。

(一註) 使用した底本は、竹取は新井信之氏「竹取物語の研究本文篇」所収の古本、伊勢は三条西家本、古今は岩波文庫(精録本)、土佐は三条西家本、大和は為家本、枕は田中重太郎氏「枕冊子」(陽明文庫本に彌富氏蔵本で補つたもの)。

の)、源氏は池田亀鑑博士「源氏物語大成校異篇」の底本(大島本・定家本・池田本)、更級は定家本である。それらの校異については、池田亀鑑博士「伊勢物語に就きての研究校本篇」、新井信之氏前掲書、阿部俊子氏「校本大和物語とその研究」、池田博士「古典の批判的処置に関する研究第三部」、田中重太郎氏「校本枕冊子」、池田博士「源氏物語大成校異篇」などを参照し、疑はしい用例は避けた。なほ源氏では池田博士「同大成索引篇」と吉沢義則博士、木之下正雄氏「対校源氏物語用語索引」の両書を使用した。

(註二) しかし、真淵の「直解」は別にこの点に触れず、高橋残夢の「管窺抄」はただ「あは歎辭也」としてゐる。この部分は大鏡にも採られてゐるが、ただ、左藤球の「群解」だけが「さだかに見分けがたくて、あれは何ぞとながめらるとなり。」としてゐるだけで、あとは歎辭とする解釈が多い。

(註三) 契沖の「源注拾遺」では、それまでの泡と解してゐた説を排し、かと同じであるとして「あはとは阿波門をかれはといふにそへたり。」と述べ、宣長の「玉の小櫛」もその説に同意してゐる。契沖は同書で、貫之集の「あはと見る道だにあるを春霞かすめる方の通かなるかな」が、古今六帖では「かはと見る」となつてゐることを引いてゐるがこの「あは」の歌は歌仙歌集本の例であつて、西本願寺本、類従本にはない。六帖の方を正しいとすべきではなからうか。差異があるとする立場からしても「かは」の方が正しい。

(註四) 源氏にはこれ以外には「あのつらき人」(空蟬)「あの須磨」(明石)があるだけであるが、いづれも河内本では「かの」である。「あのわたり」も別本系のもので「かの」になつてゐるものもある。

(註五) このあとではすぐ「かの国の人」として出てくるが、これについて「神理入門用語訣」は「かのは、まへに月の都といひしらせたるにより、かのくにといひたらんには、翁もそれとこころうべければ、かのといへるなり。あのは何事も下界とは異なることをしらすこころをふくみ、大そらをさしていふことろにて、あのといへるなり。これにてあのとかのとの用法をささるべし。」と述べてゐる。

(註六)「これ<sup>も</sup>かれ<sup>も</sup>、これ<sup>より</sup>もかれ<sup>より</sup>も」なども含む。なほ「かれこれ」となつてゐるのは古今序・土佐に一例、源氏に二例だけである。

(註七)能因系本にはない。

(註八)「たそがれ(誰そかれ)」のやうに固定したいひ方は源氏に十二例あるが、これは別にして考へる。(源氏諸本には「あれはたれどき」が一例ある。)

(註九)八三段で常陸の介のことをいつてゐるかれ三例は興味あることに能因系本ではすべてあれ。また二八九段のかれはない。

(註一〇)青木伶子氏「奈良時代に於ける連体助詞「ガ」「ノ」の差異について」

(国語と国文学・昭二七・七)

(註一一)隔たりの意識が、一方では「あの女御の御方」と尊敬すべきものをさし、一方では「あのをのこ」のやうに軽視すべきものをさすことになる。

(註一二)「ここもかしこも、ここにもかしこにも」なども含む。

(註一三)契沖の「余材抄」は「此山もとといへるはにしの山もと也」、真淵の「打聴」は「山の西のあなた」、宣長の「遠鏡」は「アノ山ノアチラウラ」と述べてゐるが、いづれもその「裏側」といふ点に注目した解釈であらう。

### 三

右に見てきたのは、実際の使用例についてであるが、そのほか、このの中にかのに通じて用ゐられるものがあることも、<sup>(註一)</sup>このことに関係があるかも知れない。右にも見たやうに、か系の語がこ系の語とともに使用されるとき、あるいは、両方の区別は明確でもなかつたと考へられはしないか。とすると、かは遠称を表はすものではあるが、一方でこと関係があるといふことは許されるであらう。かはうとき中に「したしき所」をさすとか、こに「通へども云々」とかいはれてゐることは、この両者の意味上の関連をとりあげたものであ

り、その点がまた、か<sup>と</sup>あとの差異の存するところである。(また、調査が一部しかできていないが、諸本における「こーか」の書写の違ひは「こーあ」が殆んどないのに比べて多いのも、単なる字形による書き誤りとは見られないものを示してゐるであらう。)

さらに、最も当りまへのことであらうが、口語の「コソアド」<sup>(註二)</sup>が、それぞれ一つの違つた系列をなす語であり、違つた意味を表はしてゐるなら、あとかとの違つた各系列の語は、やはり、違つた意味を表はすものではないかといふことである。

さうして、以上見てきたところ、その違ひは認められると思ふ。私は富士谷成章、大國隆正の意見に従ひたいのである。作品による違つた使ひ方があり、各語における違つた差の表はれ方があるけれども、全体としては、あ系の語とか系の語との間には差違が存する。か系の語は、話し手に関係の深いもの、既知のもの、親近性を有するものをさすときに用ゐられ、あ系の語は、話し手と関係のないもの、未知のもの(そのため不審、詰問となる)、隔たりを有するものをさすときに用ゐられる。もし、佐久間鼎博士の言にならつていふとすれば、話し手・聞き手両者の力の及ぶ範囲内のものをさすのがか系の語であり、その範囲外のものをさすのがあ系の語であつた(後には差異がなくなつた)と私は考へるのである。

(註一) 浜千代清氏「『この』小考」(平安文学研究・第十六輯)

(註二) 佐久間鼎博士「現代日本語の表現と語法」三五頁。阪倉篤義氏「日本文法の話」一四三頁。ここで両氏の間には口語ア系について見解の違ひがあるが、古くはあとかで表現し分けてゐたと見られないだらうか。

附記 本稿は昭和三十一年九月「第六回西日本国語国文学会」で行つた私の発表をもとし、それに訂正を加へたものである。発表の折、木之下正雄氏から御教示頂いた。記して御礼申しあげる。

—— 本学助教授 ——